

スポーツイベントの地域間競争と価値変容

― 別府大分毎日マラソンを例に ―

大嶋 晃司

抄録

別府大分毎日マラソンは、ランニング・マラソン大会の草分け的存在であり、長い歴史の中で培われてきた競技レベルの高さや優れたコース設定、沿道の応援などが参加ランナーから高く評価されてきた。

地域住民は「大分県の知名度やイメージの向上」、「観戦・応援の楽しみ」、「経済波及効果」といったことを評価している。一方、行政サイドではスポーツイベントが持つ地域活性化策としての役割・価値が見直されてきた。2011年に開催された第60回大会では、これまで厳しかった参加資格を緩和することによって、参加ランナーの増加を図っている。その大分県内の経済波及効果を計測すると、1億8,678万円の経済効果を発生させ、地元経済に与える影響が少なくないことが分かった。

別府大分毎日マラソンに求められる役割・価値が多様化し、乱立するランニング・マラソン大会の中で、大会の持つ強みを最も活かせる方向性を考察し、「トップランナーとレベルの高い市民ランナーがともに参加できる大会」が好ましいとの結論を得た。ただ、今後の大会の役割・価値をどう位置付けるかによって方向性は変わる。また、大会の役割・価値は継続的に実施することで、初めて効果をもたらすものであり、いかなる方向性も大会が今後も大分の地で長く開催されることが必要条件であることには変わりはない。

キーワード：(研究成果の内容を表しているキーワードを5つまで記載してください。)
スポーツイベント， 別府大分毎日マラソン， 経済波及効果， 地域活性化， マラソン大会

* 株式会社 大銀経済経営研究所 〒870-0035 大分県大分市中央町2丁目9番23号

Inter-regional competition and value change in sporting events

—The case of the Beppu-Oita Mainichi Marathon—

Koji Oshima*

Abstract

The Beppu-Oita Mainichi Marathon is a pioneer among marathon events. Over its long history it has earned a reputation among participants for high competitive standards, outstanding course design and enthusiastic cheering by spectators along the course.

Local residents also hold the event in high regard, citing the positive impact on Oita prefecture's reputation and image, the enjoyment they feel in watching and cheering during the race, and the economic spillover effects. Meanwhile, governmental authorities have been reassessing the role and value of sporting events in terms of regional revitalization. The 60th annual marathon, held in 2011, attracted an increased number of participants following a relaxation of the previously strict eligibility criteria. The economic spillover effects of the event were found to amount to 186,780,000 Japanese yen, demonstrating the event's considerable impact on the local economy.

This study explored ways to maximize the distinctive strengths of the Beppu-Oita Mainichi Marathon as expectations for its role and value become more diverse, and the field of marathon events in Japan becomes increasingly congested. The study concluded that the most desirable way forward for the event is to evolve as "a marathon for both top athletes and local residents at a high competitive level". This direction may be altered, however, in light of the role and value attached to the event from now on. It should also be noted that positive effects will only be felt if the role and value are sustained in the event's ongoing operation. Whatever direction is chosen, it will be essential that the event continues to be held in Oita for many years to come.

Key Words : Sporting events, Beppu-Oita Mainichi Marathon, economic spillover effects, regional revitalization, marathon events

* Daigin Economic and Management Institute Co., Ltd. 2-9-23 Chuocho, Oita-shi, Oita-ken 870-0035

1. はじめに

全国各地で様々なスポーツイベントが開催されている。スポーツイベントはスポーツ競技人口の拡大、競技技術の向上に加え、地域や人材の交流、地域の活性化、情報発信など多くの役割を果たしている。数あるスポーツイベントの中で、現在人気のあるスポーツイベントといえば、ランニング・マラソン大会である。健康志向の高まりを追い風に全国各地でランニング競技者が増え、一大ブームが到来している。競技人口の増加に伴い、全国各地で開催されているランニング・マラソン大会も人気を集めている。

大分県でも数多くのランニング・マラソン大会が開催されている。その中でも、「別府大分毎日マラソン」は1952年に始まり、地元のスポーツイベントの1つとして定着しているが、ランニングブームによるランニング・マラソン大会の乱立などで参加ランナーの奪い合いといった競争、いわゆる地域間競争に巻き込まれており、大会の意義、価値が問われている。そこで、大分県という地方で半世紀以上に亘り開催されてきた別府大分毎日マラソンの意義、価値、今後の方向性を考察していきたい。

2. 目的

別府大分毎日マラソンが地域にどのような効果・影響をもたらしているのかを、経済的側面と社会的側面から整理し、大会開催の意義、価値を評価した。また、地域間競争の様相を呈するランニング・マラソン大会の中で、本大会が目指す方向性についても検討した。

3. 方法

- ①別府大分毎日マラソンの歴史や全国のマラソン大会での位置付けなど、大会概要の整理。
- ②「別府大分毎日マラソン大会事務局」の協力を得て、第60回別府大分毎日マラソン大会（2011年2月6日開催）に参加したランナー向けにアンケート調査を実施し、大会の評価、参加に伴う各消費額などを把握する。また、結果をもとに大分県産業連関表を用いて第60回大会の開催に伴う大分県経済に与える経済波及効果を定量的に試算。
- ③大分県民に対してアンケート調査を実施し、地域住民が認知している大会開催による効果・影響を把握。
- ④以上を踏まえて、マイケル・E・ポーターが提唱した「ファイブ・フォース分析」のフレームワークを活用して、大会を取り巻く環境を整理し、大会の持つポテンシャルが最も活かせる今後の方向性について検討。

4. 結果及び考察

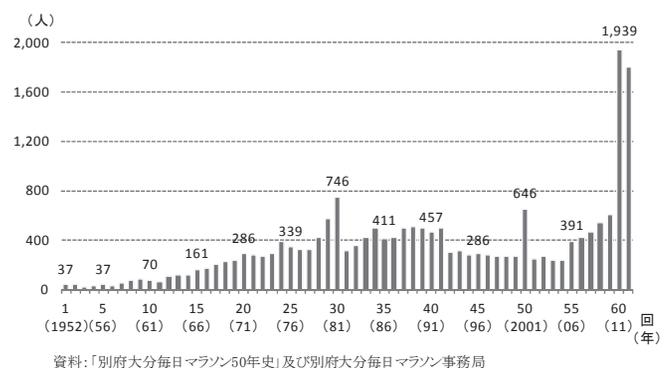
(1)別府大分毎日マラソンの概要と位置づけ

①概要

別府大分毎日マラソンは、日本が戦後オリンピックに復帰した1952年1月20日に「別府マラソン」として始まった。当時、ヘルシンキオリンピック（フィンランド）を控えたマラソン代表候補14人が、別府市で強化合宿に臨んでいる中、大分県中津市出身でコーチの池中康雄氏が「オリンピックで日本選手を優勝させるため、地元大分でマラソン大会を開こう」と提唱したことをきっかけに創設された。その後、1983年の第25回大会から現在の「別府大分毎日マラソン」に大会名が改称された。回数を重ねる中で多くのランナーがこの大会をステップとして、オリンピックや国際大会で上位入賞者や新星を輩出したことから、「新人の登龍門」と呼ばれる大会として全国的に定着していった。

参加者数の推移をみると、第1回目は37名で始まった。10マイルロードレースの最盛期にあたる1954年の第3回大会では参加者がわずか17名で存続が危ぶまれたが、国内マラソン競技の強化とともに参加者は増加に転じた。1963年の第12回大会で参加者が100名を突破し、その後も順調に増加した。第30回、第50回など節目の大会で参加資格を緩和した時を除けば、1990年代前半までは概ね300～400名前後、その後は同時期に東京国際マラソンが開催されたことなど有力選手の他大会への分散化により200～300名前後で推移した。2007年以降はランニングブームの到来により増加に転じ、第60回大会は参加資格の緩和で、過去最高の1,939名が参加する大規模大会として開催された。2012年の第61回大会も前回大会同様の参加資格のもと、1,796名が参加している。

図表1 別府大分毎日マラソン参加者数の推移



②全国のマラソン大会の中での位置づけ

国内マラソン大会の歴史の中で、最も古い大会は1946年に大阪で始まった「全日本毎日マラソン選

手権」、現在の「びわ湖毎日マラソン」である。2番目に古い大会は1947年に熊本で始まった「金栗賞朝日マラソン」、現在の「福岡国際マラソン」、3番目に古い大会が、1952年に始まった「別府マラソン」、現在の「別府大分毎日マラソン」である。これらは「日本三大クラシックレース」と呼ばれており、別府大分毎日マラソンは国内マラソン大会の中で草分け的存在として位置付けられる。なお、この日本三大クラシックレースの中で、開催地を変えずに行われているのは、別府大分毎日マラソンだけで、一カ所に定着した大会としては最も古い大会であるといえる。

国内の陸上競技界を統轄する公益財団法人日本陸上競技連盟が主催するフルマラソン大会は、東京マラソン、びわ湖毎日マラソン、福岡国際マラソン、横浜国際女子マラソン、大阪国際女子マラソン、名古屋ウィメンズマラソンの6大会となっている。この中で東京マラソン、びわ湖毎日マラソン、福岡国際マラソンは、国際大会での男子代表を決定する選考レースであり、「日本男子三大レース」として位置付けられている。一方、別府大分毎日マラソンは日本陸上競技連盟が後援するフルマラソン大会であり、他に北海道マラソン、神戸マラソン、防府読売マラソンの3大会が後援大会となっている。別府大分毎日マラソンは、年によって世界陸上選手権大会や日本事業団海外派遣男子選手などの選考レースや参考レースとなるなど、「日本男子三大レース」に次ぐ準代表選考レースとしての位置付けにある。

国際陸上競技連盟（IAAF）による世界のロードレース格付けでは、別府大分毎日マラソンは最高格付けのゴールドラベルに次ぐシルバーラベル認定大会となっている。因みに、国内のマラソン大会でゴールドラベル認定大会は、びわ湖毎日マラソン、東京マラソン、福岡国際マラソンである。

(2)別府大分毎日マラソンの評価

今回、参加ランナーに対してアンケート調査を実施した。調査概要は図表2の通りである。なお、アンケート調査から参加に伴う消費額も把握し、後述する経済波及効果測定の基礎データとして活用した。

①大会評価

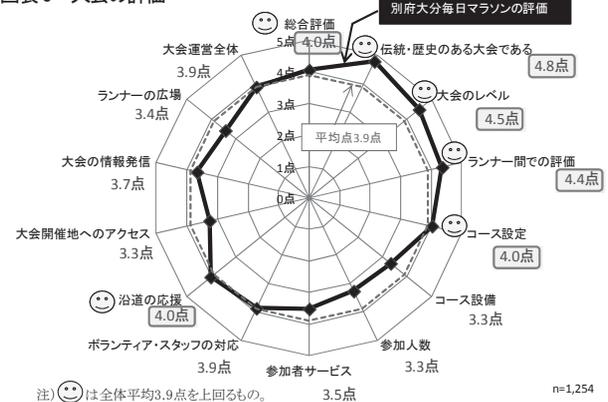
別府大分毎日マラソンの各項目について5点満点で評価してもらった。平均点をみると、「伝統・歴史のある大会である」が4.8点と最も高く、ほぼ満点（5点）に近い結果となっている。次いで「大会のレベル」が4.5点、「ランナー間での評価」が4.4

図表2 参加ランナー向けアンケート調査概要

調査名	「別府大分毎日マラソン」に関するアンケート調査
調査対象	第60回別府大分毎日マラソン大会(2011年2月6日開催)に一般参加選手としてエントリーした2,183名
調査方法	郵送による配布・回収
調査期間	2011年8月9日～31日
回収状況	発送数2,183票、 有効回収数1,254票(回収率57.4%)

点、「コース設定」と「沿道の応援」がともに4.0点となっている。反対に、平均点が最も低かったのは、「コース設備」、「参加人数」、「大会開催地へのアクセス」で、いずれも3.3点となっている。「総合評価」は4.0点となり、高い評価を得ている。

図表3 大会の評価



②お勧めマラソン大会

5年間で参加したマラソン大会でお勧めのベスト1を尋ねた結果は、「別府大分毎日マラソン」が406件で最も多く、約3人に1人がベスト1のマラソン大会として挙げており、評価が高い。次いで、「東京マラソン」が183件、「福岡国際マラソン」114件となり、ともに100件を超えている。全体的に楽しむ市民マラソン大会よりも日本陸上連盟が主催、後援するなど競技色の強い大会が上位に挙げられている。

図表4 お勧めのベスト1大会（上位5位）

No	大会名	件数
1	別府大分毎日マラソン	406件
2	東京マラソン	183件
3	福岡国際マラソン	114件
4	防府読売マラソン	53件
5	長野オリンピック記念 長野マラソン	40件

(3)別府大分毎日マラソンの開催による効果・影響
 ここからは別府大分毎日マラソン開催による地域への効果を、経済的側面と社会的側面から整理していく。

①経済的側面

別府大分毎日マラソンが開催されることによる大分県内に与える経済波及効果について、平成17年大分県産業連関表を用いて定量的に試算した。ここでは2011年2月6日に開催された第60回大会の主催者運営支出と参加ランナー及び関係者の消費に伴う効果について計測を行った。

なお、主催者運営支出は別府大分毎日マラソン大会事務局の協力を得て第60回大会の決算書を、参加ランナー及び関係者の消費額は、前述の参加ランナー向けのアンケート調査を利用して推計を行った。

主催者側の準備費、運営費、開催費、競技費、事務局費、特別経費といった各支出項目の中から県内への支出分を主催者運営支出とした。参加ランナー及び関係者の県内消費額は、アンケート結果をもとに交通費、宿泊費、飲食費・土産代などの諸費用の3項目を対象として推計した。その結果が図表5の通りである。この県内総消費額1億7,843万円をその消費項目に基づき、産業連関表36部門の該当部門に振り分けを行った。

図表5 主催者、参加ランナー及び関係者の県内総消費額

主催者運営支出(県内支出分)		6,436 万円
参加ランナー等	交通費	3,947 万円
	宿泊費	3,217 万円
	飲食費・土産代など諸経費	4,243 万円
県内総消費額		17,843 万円

以上をもとに第60回大会の大分県内への経済波及効果は、直接効果から第2次波及効果までを合計した1億8,678万円となった。1日だけのイベントであることを考慮すれば決して少なくない金額といえる。

今回試算した第60回大会は参加資格(制限記録)が緩和され、約2,000人規模の大会となった。第60回大会以前は、ここ数年400~600名の参加ランナーで推移していることから、経済波及効果は今回試算結果よりも小さく、経済効果は限定的であったと考えられる。そのため、第60回大会は参加資格を緩和したことが地域経済に大きな影響をもたらしたといえる。

図表6 大会の開催に伴う経済波及効果

[設定]	
最終需要額	17,843 万円
うち県内最終需要額	11,709 万円



[経済波及効果分析結果]

単位:万円

区 分	生産誘発額	うち粗付加価値誘発額	
		うち粗付加価値誘発額	うち雇用者所得誘発額
総合効果	18,678	10,546	5,139
直接効果(県内需要額)	11,709	6,444	3,324
第1次間接波及効果	4,277	2,343	1,119
第2次間接波及効果	2,692	1,758	695
県内需要額に対する波及倍率	1.60		

②社会的側面

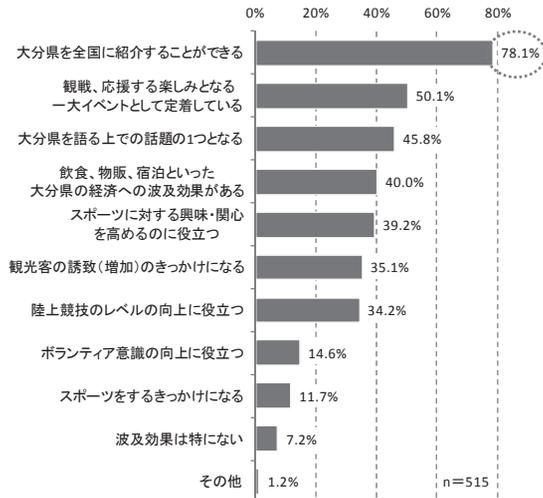
一般にマラソン大会の開催による社会的効果としては、「地域の知名度やイメージの向上」、「郷土愛の喚起」、「地域コミュニティの強化」、「スポーツ人口の増加」、「ボランティア文化の浸透」などが考えられる。そこで、別府大分毎日マラソンによる地域への効果を地域住民がどのように評価しているかを把握するため、アンケート調査を実施した。調査概要は図表7の通りである。

図表7 地域住民アンケート調査概要

調査名	「別府大分毎日マラソン」に対するアンケート調査
調査対象	大分県に在住の15歳以上の男女 ・10~20代、30代、40代、50代、60代以上の各年代 103名、合計:515名
調査方法	インターネットリサーチ (調査実施機関:株式会社マクロミル(東京都))
調査期間	2012年1月31日~2月1日

別府大分毎日マラソンの効果・影響は、「大分県を全国に紹介することができる」が78.1%と圧倒的に多く、大分県の知名度向上に役立っていると認識している人が多い。次いで、「観戦、応援する楽しみとなる一大イベントとして定着している」が50.1%、「大分県を語る上での話題の1つになる」が45.8%となり、大会のエンターテインメント性や郷土愛の喚起に繋がることを評価する人も少なくない。以下、「飲食、物販、宿泊といった大分県の経済への波及効果がある」(40.0%)、「スポーツに対する興味・関心を高めるのに役立つ」(39.2%)、「観光客の誘致(増加)のきっかけになる」(35.1%)、「陸上競技のレベルの向上に役立つ」(34.2%)の順になっている。また、「波及効果は特にない」はわずか7.2%となり、大会の開催による何らかの効果・影響が認識されていることがうかがえる。

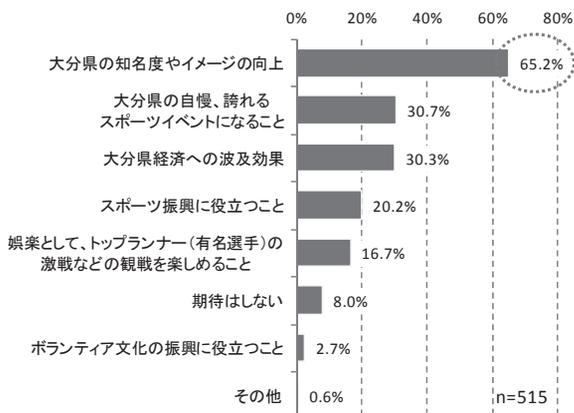
図表8 地域住民の考える大会による効果・影響



③地域住民が考える今後も期待する効果・影響

別府大分毎日マラソンに対し、今後も期待する効果・影響は、「大分県の知名度やイメージの向上」が65.2%と、3人に2人は引き続き大分県の広報活動を担う宣伝イベントとしての役割を期待している。続いて、「大分県の自慢、誇れるスポーツイベントになること」が30.7%、「大分県経済への波及効果」が30.3%となり、大会を通じての郷土愛の喚起に繋がる話題になることや経済的側面も期待されている。以下、「スポーツ振興に役立つこと」(20.2%)、「娯楽として、トップランナー(有名選手)の激戦などの観戦を楽しむこと」(16.7%)、「ボランティア文化の振興に役立つこと」(2.7%)の順になっており、スポーツ振興やエンターテインメント性、ボランティア振興といった期待もあるが、相対的には低くなっている。

図表9 地域住民の考える今後も期待する大会の効果、影響



(4)別府大分毎日マラソンの展望

別府大分毎日マラソンの開催は、地域に様々な効

果、影響をもたらし、それらを地域住民も認識している。しかしながら、地域間競争の様相を呈するランニング・マラソン大会の中で、別府大分毎日マラソンが今後も長く大分県で開催され続けるためには、誰をターゲットに、どのようなテーマで、どのような特色がある大会にして行くかを明確にすることが求められる。別府大分毎日マラソンは長い歴史と実績から他のマラソン大会と比較して様々な方向性が考えられるが、大きく分けて、「トップランナーが走る競技色の強い大会」、「トップランナーと参加タイム制限などでレベルの高い市民ランナーが参加する大会」、「多くの人が参加できる市民マラソン大会」の3つの方向性が考えられる。そこで、競争戦略の観点から大会の方向性を探ってみる。具体的には、マイケル・E・ポーターが提唱した「ファイブ・フォース(5つの競争要因)分析」のフレームワークを活用し、大会の取り巻く環境を整理し、大会の強み(ポテンシャル)を適合させ、今後の方向性を考察する。

ファイブ・フォース分析とは、企業の競争戦略を考える前提として、外的環境を分析する際に使われるフレームワークで、①新規参入業者、②競合他社、③代替商品、④買い手、⑤売り手の5つの視点で検討することである。

別府大分毎日マラソンの取り巻く環境を、ファイブ・フォース分析のフレームワークに当てはめると、①新規のランニング・マラソン大会(新規参入業者)、②既存のランニング・マラソン大会(競合他社)、③他のスポーツイベント(代替商品)、④参加ランナー(買い手)、⑤主催者(売り手)の各視点に分けられる。

①新規のランニング・マラソン大会

ランニング・マラソン大会は、大がかりな施設設備が必要なく、既存の道路や施設を利用して開催することが可能で、比較的費用をかけずに取り組むことができるイベントである。そのためスポーツイベントの中でも、開催にあたっての参入障壁が低いイベントであるといえる。実際に新たなランニング・マラソン大会の誕生が全国に広がっている。最近の特徴としては、趣味でマラソンを楽しむ市民ランナーを対象に「参加すること」を重視した「市民マラソン大会」の立ち上げが続き、大阪、神戸、京都といった大都市を中心に参加ランナーが1万人を超える大規模な市民マラソン大会が誕生している。

②既存のランニング・マラソン大会

全国で開催されているランニング・マラソン大会は、(株)アールビーズ「月刊ランナーズ 2011年8

月号別冊ランニング大会ガイド」によると、2011年7月から2012年6月までの1年間の大会予定は904件に上る。この中で別府大分毎日マラソンが開催される2月に開催される大会は77件で、さらに、同日（今年（2012年）は2月5日）に開催される大会は13件となっている。

次に、別府大分毎日マラソンと同じく42.195kmを走るフルマラソン大会に絞って見ていく。日本陸上競技連盟の公認コースで開催されるフルマラソン大会は59件で、その内2月に開催されるものが11件ある。大会の開催日は年によって違うことには注意を要するが、別府大分毎日マラソンの開催される2月には、国内最大規模の大会で「日本男子三大レース」の1つである東京マラソンや、別府大分毎日マラソンと同じく「九州三大マラソン大会」の1つである延岡西日本マラソンといった国内有数のマラソン大会が開催されている。

現在、別府大分毎日マラソンに参加するためには、参加資格としてフルマラソンで3時間30分以内の公式記録を持つランナーでなければならない。この参加資格よりも厳しい条件を設けているのは、大阪国際女子マラソン、東京マラソン、横浜国際女子マラソン、名古屋ウィメンズマラソン、びわ湖毎日マラソン、福岡国際マラソンの6大会となっている。但し、東京マラソン、名古屋ウィメンズマラソンは、別途一般参加資格を設けて市民マラソンの要素も併せ持っている。マラソンはウィンタースポーツのため、これらの大会は1～3月に集中して開催されており、別府大分毎日マラソンはこれらの大会に挟まれる時期に開催されている。

最近のマラソン大会の動向としては、より多くの参加ランナーを受け入れる取り組みが活発化しており、参加資格がある大会では資格の緩和や、参加定員のある大会では定員規模の拡大などが行われている。

③他のスポーツイベント

ランニング・マラソン大会以外に参加するスポーツをテーマにしたイベントは、各地の体育大会など全国で数多く開催されている。一方、「みる」スポーツは、全国的には野球、サッカーなどのプロスポーツが多い。大分県内でも、サッカーの「大分トリニータ」、バスケットボールの「大分ヒートデビルズ」、フットサルの「バサジィ大分」、バレーボールの「大分三好ヴァイセアドラー」といったプロスポーツを観戦することができる。

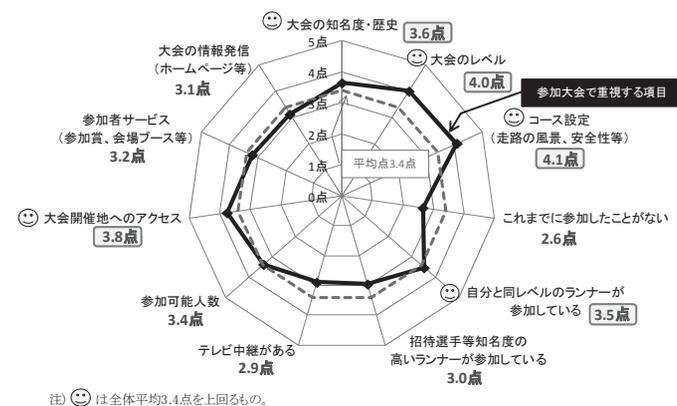
④参加ランナー

ランナーは自分の価値観に基づいて、参加する大

会を選択する。その価値観の目安として、前述した参加ランナー向けアンケートの『参加する大会の各項目の重視度（5点満点）』をみってみる。全体平均よりも上回った項目は、「コース設定」（4.1点）、「大会のレベル」（4.0点）、「大会開催地へのアクセス」（3.8点）、「大会の知名度・歴史」（3.6点）、「自分と同じレベルのランナーが参加している」（3.5点）となっている。これらの項目の評価が高い大会がランナーから選ばれる大会になると考えられる。反対に重視度が低い項目は「これまでに参加したことがない」（2.6点）、「テレビ中継がある」（2.9点）、「招待選手等知名度の高いランナーが参加している」（3.0点）となっている。

専門的なトレーニングを受けたトップランナー以外の一般的なランナーは、はじめはタイム等を考えず、楽しく走る「ファン・ラン」派であるが、次第に日頃の練習の成果を発揮する場を求める「シリアル」派に転向していく傾向がある。特に市民ランナーでは、フルマラソンを3時間以内で完走する「サブスリー」は1つのステータスとなっている。

図表10 参加する大会での各項目の重視度



⑤主催者側

ランニング・マラソン大会を開催するにあたっては、既存の道路や施設を利用することができる反面、開催規模はそれらに制約される。特に、道路を封鎖することによる交通規制は地元住民や警察の理解が必要である。別府大分毎日マラソン事務局に対するヒアリングでは、2011年の第60回大会で参加制限を緩和した影響で交通規制時間が大幅に伸び、交通規制に対する苦情も少なくなかった。大分県警からも現状のコースでの更なる交通規制時間の延長は難しいとの回答を得ている。また、別府大分毎日マラソンでは、スタートとゴールの地点が違うことから、参加ランナーの更衣室、荷物の搬送などの制約も大きい。もし、現在の参加規模を拡大する場合、コースの変更、スタート・ゴール地点の変更などの

抜本的な見直しが必要と思われる。

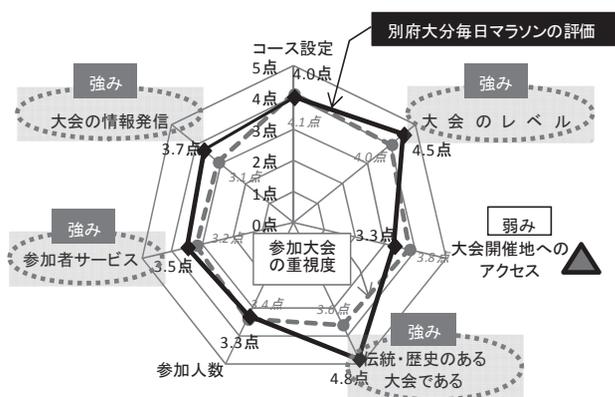
別府大分毎日マラソンは、毎年、国内外の招待選手が参加してのトップランナーによる高レベルなレースが展開されており、メディア価値の高い大会である。そのため、大会運営費の多くは放映料を中心としたスポンサー料で賄われている。現状のサービス水準を維持するためには、スポンサーの意向は無視できないものとなっている。つまり、広告、宣伝に繋がるメディア価値のある大会にしていくことが求められる。

⑥別府大分毎日マラソンの強み

別府大分毎日マラソンの強みを参加ランナーの視点で整理してみる。前述した『別府大分毎日マラソンの評価』と『参加する大会の各項目の重視度』をもとに、「コース設定」、「大会のレベル」、「大会開催地へのアクセス」、「大会の知名度・歴史」、「参加人数」、「参加者サービス」、「大会の情報発信」の7項目について、別府大分毎日マラソンの評価と参加する大会の重視度を比較する。

参加する大会の各項目の重視度よりも別府大分毎日マラソンの評価が上回っているのは、「大会のレベル」、「伝統・歴史のある大会である」、「大会の情報発信」、「参加者サービス」の4項目である。これらは別府大分毎日マラソンが評価されている項目であり、言い換えれば別府大分毎日マラソンの“強み”といえる。特に「大会のレベル」と「伝統・歴史のある大会である」が広く認知されていることは、過去の実績から生まれるものであり、他のマラソン大会にはない強みであるといえる。

図表11 大会の強みと弱み



(5)今後の方向性

以上の環境分析をもとに、別府大分毎日マラソンの強みが最も活かさせる方向性としては、「トップランナーと参加タイム制限などでレベルの高い市民ランナーが参加できる大会」と考えられる。

別府大分毎日マラソンがこれまでターゲットとしていたランナーは、実業団に所属したり専門的なトレーニングを受けたトップランナーであった。しかし、オリンピックなどの主要な国際大会への代表選手を選考する競技色が強い大会は、男子で東京マラソン、びわ湖毎日マラソン、福岡国際マラソンの3大会、女子で大阪国際女子マラソン、横浜国際女子マラソン、名古屋ウィメンズマラソンの3大会に絞られ、国内の有力トップランナーはこれらの大会に絞り込んで参加している。また、日本陸上競技連盟が公認するコースで開催される大会は全国で59件に上り、開催は10月から3月に集中し、トップランナーの各大会への分散化が顕著に表れている。このため、別府大分毎日マラソンは、これまでと同様にトップランナーだけを対象とした大会では特徴を出しにくくなっている。

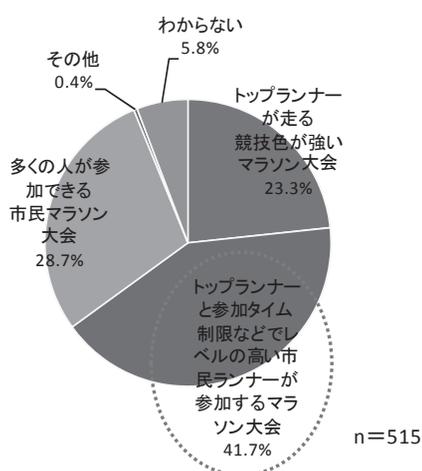
一方、趣味でマラソンを走る市民ランナーが急増していることから、全国各地で「市民マラソン大会」の立ち上げや、既存のランニング・マラソン大会の市民マラソン化の流れが起きている。別府大分毎日マラソンも第60回大会で参加資格の制限タイムを緩和して市民マラソン化の動きをみせている。大会を地域活性化に繋げる視点で考えると、参加ランナーが多い大会ほど地域に与える影響は大きくなるが、ランニング・マラソン大会の乱立で参加ランナーの獲得合戦は更に激しさを増すことが予想される。また、市民マラソン化は別府大分毎日マラソンが評価されている「大会レベルの高さ」といった強みが希薄化するものと思われる。主催者側の視点でも、市民マラソン化によるメディア価値の低下によるスポンサー離れといったことも懸念される。参加ランナーの視点では、アンケートから市民マラソン化に対する反対意見が多くみられ、これまで参加してくれたランナーが離れていくことも考えられる。

別府大分毎日マラソンは、有力トップランナーからは相対的な位置付けが低下しているが、マラソン大会全体で見れば依然として競技色が強い大会と認知されている。また、市民ランナーの急増を別府大分毎日マラソンの発展の機会と捉えるためには、市民ランナーが憧れる大会とすることが望まれる。市民ランナーの多くは、大会参加や練習を重ねるうちに自分自身の走ったタイム、記録に挑戦するといったシリアス派市民ランナーになる。市民ランナーの増加は、シリアス派市民ランナーのすそ野を広げている。

そこで、トップランナーと参加タイム制限などで一部の限られた市民ランナーが参加できる形態が伝統とレベルの高さを保ちながら、市民ランナーか

らは憧れの大会として位置付けられる別府大分毎日マラソンの目指すべき方向である。シリアス派市民ランナーをターゲットにトップランナーと本物のレースを体験できる魅力を提供できる大会として差別化していくことが市民ランナーの憧れる大会になると考えられる。また、地域住民に対するアンケートからも大会の最も良いと思う方向性は、「トップランナーと参加タイム制限などでレベルの高い市民ランナーが参加する大会」が41.7%と最も多くなっており、地域住民も長い歴史と実績を蓄積した別府大分毎日マラソンしかできない方向性として認識されていると考えられる。

図表 12 地域住民が考える大会の方向性



5. まとめ

別府大分毎日マラソンは、大分県で60年以上続いている歴史あるスポーツイベントである。この長い歴史の中で、別府大分毎日マラソンは大分県の知名度やイメージの向上、地域住民に感動と興奮を与える「みる」スポーツとしてのエンターテインメントの提供、郷土愛の喚起、地域コミュニティの強化といった役割・価値を果たし、それらを地域住民も評価している。しかしながら、スポーツイベントが持つ地域活性化策としての役割・価値が見直され、別府大分毎日マラソンも新たな方向が模索されている。実際に、今回の調査で大会の参加資格のフルマラソンを2時間50分以内で完走できるランナーから3時間30分以内に完走できるランナーへと緩和したことで、1億円を超える経済効果を新たに発生させていることが分かった。しかも、参加ランナーに走った体験・感動と共に大分というイメージが定着し、再来訪や情報発信の副次的な効果も期待できることから将来に亘って地元経済に与える影響は少なくない。

ただ、地域活性化を狙ったランニング・マラソン大会の乱立で、大会間、ひいては地域間の競争はますます激しくなっている。別府大分毎日マラソンは、

同一地域で開催される最も歴史のある大会であり、今後どのような大会が開催されてもこの時間的な厚みは決して追い越すことができないものである。現在、別府大分毎日マラソンに求められる役割・価値が多岐に亘り、大会の方向性が問われている。今回の調査では、「トップランナーとレベルの高い市民ランナーがともに参加できる大会」の方向性を打ち出したが、大会の役割・価値をどう位置付けるかによって方向性は変わる。また、別府大分毎日マラソンに求められる役割・価値は継続的に実施することで、初めて効果をもたらすものであり、いかなる方向性も大会が今後も大分の地で長く開催されることが必要条件であることには変わらない。

参考文献

- ・「スポーツイベントの経済学」
原田宗彦、(株)平凡社、2002年
- ・「スポーツ経済効果で元気になった街と国」
上条典夫、(株)講談社、2002年
- ・「競争の戦略 新訂版」
M.E. ポーター著、土岐坤・中辻萬治・服部照夫
訳、ダイヤモンド社、1982年
- ・「スポーツライフデータ 2010」
笹川スポーツ財団、2010年
- ・「スポーツ産業論 (第4版)」
原田宗彦編著、(株)杏林書院、2005年
- ・「レジャー白書 2011」
(財)日本生産性本部、2011年
- ・「地域づくり四月号」
(財)地域活性化センター、2011年4月20日
- ・「疾走—別府大分毎日マラソン大会 50年史」
別府大分毎日マラソン大会実行委員会、2001年
- ・「九州経済調査月報 2011年2月号」
(財)九州経済調査協会、2011年2月15日
- ・「ランナーズ7・8月号」
(株)アールビーズ、2011年7・8月
- ・「九重“夢”大吊橋の地域経済波及効果調査」
(株)大銀経済経営研究所・大分大学、2008年

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。